

の大きな特徴のことだったのだ。  
海外の保育研究者が日本の保育現場を  
観察していた時、「一体いつ活動が始ま  
るのか」と質問があつたという話を聞い  
た。つまり、文字や数を取り出した「お  
勉強の時間」を期待しているようなのだ  
が、その園では、延々と遊び続していく  
だけなのだ。

しかし、そうした遊びの中には、数に  
触れたりそれを利用して楽しむ要素がい  
くらでも埋め込まれているものだ。

さらに興味深いのが、そうした遊びや  
生活を通して、足し算や引き算ができる  
ようになつた日本の子どもたちに、「ど  
うしてできるようになったの?」と尋ね  
ると、なんと「自分で考えた」と答えた  
のだというのだ。

くらでも埋め込まれているものだ。  
さらに興味深いのが、こうした遊びや  
生活を通して、足し算や引き算ができる  
ようになつた日本の子どもたちに、「ど  
うしてできるようになったの?」と尋ね  
ると、なんと「自分で考えた」と答えた  
のだというのだ。

この感覚こそが、数や量を身体的感覺  
を通して獲得している証。この骨太な理  
解が、学童期以降の抽象的な思考を支え  
る確かな土台となる。

先日の「外の日」の遊びの小道具にと、その箱と一緒におみたちのある日。



○番書く」と言葉を交わしながら、それぞれが書ける数字を書いて、その番号の棒に何枚だつて貼つていけばいい。「○

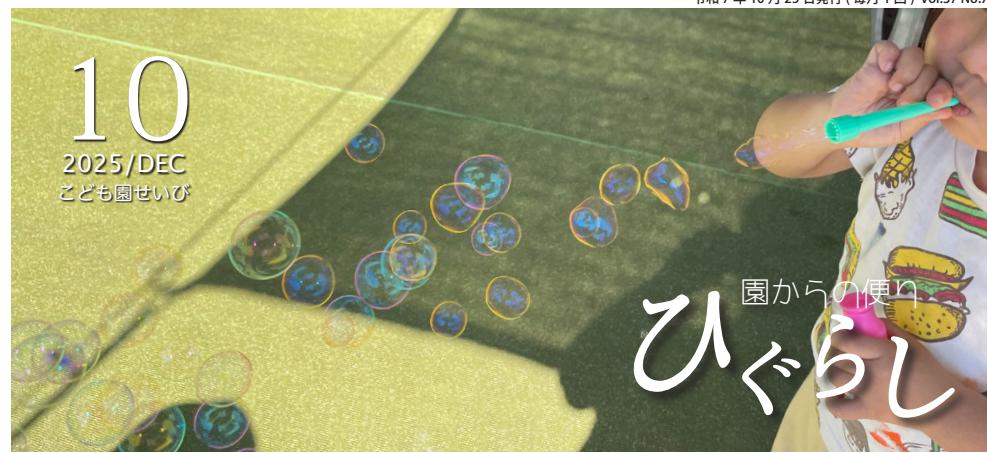
ていくと、「数字にしたら?」というアイデアが。番号に対応する内容を別に決めていけば、色々なおみくじになるという発想に感心する保育者。

早速、みんなでみくじ棒を数えると15本。「あおぐみ、15人だからじゃない?」「だから、箱の色も青なんだ」と作り手の配慮にも思いを巡らせていく。

生のお兄ちゃん。  
その彼が、普段の遊びでも使えるようと、新たなおみくじを作ってくれた。箱からみくじ棒を取り出していくと、「何も書いてないじゃん！」。そう、あおぐみで自由に使えるようになると、まっさらなものを新たに準備してくれたのだった。  
早速、その棒に何を書こうかと相談し

猛暑の中、畑の草刈りが追い付かなかつたせいだと農園のあるじ。そして、作付け内容も考え直していきたいので、芋掘りも今年限りで…そう言葉が続いた。まさかこの気候変動が、こんな形で影を落とすとは…互いの先代を含めて30年を超えるお付き合いに、ただただ感謝の言葉しか浮かばなかつた。

遊びや生活に埋め込まれているとは言え、そこを素通りしないようポンと肩を叩き、ほらっと言つてその意味や価値に気づくよう、そつと手を添えていくことが保育なのだ。



天空の大地で

先日、おにぎりを持って、芋掘りに出かけた4・5歳児。長引く秋雨の隙間を縫うように、少し肌寒い曇り空の下を30分ほどの道のり。子どもたちにとつてはそれなりの遠出だ。

少し小高くなっているこの地域から、木は一旦直道へとれる。そこそこ三つの道

「これが、大きいお芋」と保育者が基準となるものを手にとつて見せると、「じゃあ、これは小さいだよね」「これは中くらいだ」と自分なりに見比べながら次々と選び直していく。



まずは一日街道へと下る そしてその道の向こう側、街道に沿うように延びる丘陵地。そこを駆け上がった先に、空に溶け込むように大きく農地が広がつていて。毎年お世話になつて いる伊藤農園の芋畑は、その一角にある。

そんな起伏もある道のりに加え、おにぎりが入つていたりユツクに帰路はお芋が入るので、子どもたちにはその距離は少し長く感じるのかかもしれない。

その数日後、彼らが持ち帰つた芋を入れたダンボールが、玄関前に置かれていて。そこに気づいた3歳児たち。

その中を覗きながら、「食べてもいいのかな」と言う声を聞いた保育者が、「じゃあ、小さ



A photograph showing a child's hand reaching towards a large, reddish-brown sweet potato lying on a light-colored tiled floor. The child is wearing a white long-sleeved shirt. The background consists of a grid of square tiles.

それが終わってみんなの持つ芋の数を順番に数えていくと17本。今日の登園人数は、その場にいない者も含めて22人なので、「どっちが多いかわかる?」と問い合わせてみると「うーん」。

そこで、「18、19、20:」と数えながらさらに芋を子どもたちに手渡していく。そして、「21、22:」と言った瞬間に、「先生、ストップ」と声がかかる。そして「小さいお芋、22個選べたね」と声が上がるのだった(10月24日「大きいのと中くらいのと小さいの」)。

こうした日常の生活や遊びの中で、その必要性を伴いながら、大きさや数に親しんでいくことが、実は日本の幼児教育・保育